

## 西欧諸国におけるリュミエール映画の受容

—シネマトグラフの世界的浸透〈その1〉—

永 治 日 出 雄

Hideo NAGAYA

(ヨーロッパ文化選修)

### I シネマトグラフの国外進出とリュミエール映写技師団の編成

1895年12月28日グラン・カフェで始められたシネマトグラフ一般公開は数千の観衆を連日魅了し、まもなく彼らの熱狂は国境や波濤を越えて伝播した。当時パリのグラン・ブルヴァールは興行の世界的な中心であり、リュミエール一家の壮挙には各国の知識人や王侯貴族からも強い関心が向けられる。また、リヨン郊外のモンプレジール工場へは新発明の買付けを求めてベルギー、スイス、ドイツ、ポルトガル、さらにはエジプト、トルコ、メキシコより問合せが殺到した。絶大な反響に自信を強めたリュミエール父子は、第1号映写機の製作者カルパンティエに200台を追加発注し、独占的な営業と興行への地歩を固めた<sup>1)</sup>。

父アントワーヌ・リュミエールは世界最大の写真材料企業をすでに築き、シネマトグラフの開発をめぐっても実業家としての才幹を遺憾なく発揮する。従業員300を擁するリュミエール社は、写真乾板の販売と同じく代理・委託の制度を採用し、新発明の普及のため100名近くの映写技師団を編成した。たとえばベルギーのオスモン男爵は興行委託と技師派遣について同社からつぎのような書翰を受け取った<sup>2)</sup>。

あなたが得られる総収益の40%を、当方に支払われるようお願い致します。ベルギーにおける興行のため、映写機2台ないし3台を貸与しましょう。わが社に所属する映写技師がお貸しした器械を操作し、収益の処理をも担当します。ただし、この際映写技師への報酬ならびに興行に要する経費はあなたに負担して頂きます<sup>3)</sup>。

これら映写技師の任務は五大大陸のあらゆる国々へ赴き、シネマトグラフの撮影と映写を行なうところにある。主任技師シャルル・モワッソンの指揮によって早期から国外に派遣されたのは、当時17歳であった従業員フランシス・ドゥブリエ、種々の職業を遍歴し、作曲の業績もあるユージュヌ・プロミオ、アルジェリアの出身でアルル第3連隊の軍籍をもつフェリクス・メギシュなどであり、ロンドンで盛名を博した興行師フェリシアン・トルウェも彼らに加わった<sup>4)</sup>。1925年映画史家コワサックの労で公された『旅日誌』において、プロミオはシネマトグラフの試写から映写技師団への参加に至る経緯を語る。

1895年6月フランス写真協会リヨン大会で行なわれた最初の映画試写会に、私は幸運にも出席した。すべての人々と同じく私も驚嘆し、オーギュスト・リュミエールとルイ・リュミエールの両氏に近づけるよう万策を講じた。そして、マルチニエール工

業専門学校でお世話になったバスカル先生の紹介で、1896年初めから光栄にも私はリュミエール兄弟の事業へ参加することになった。

まず新しい器械を熟知するためみずから勉強し、ついで映写技師の養成を兄弟から委嘱された。フランスの内外に彼らを派遣して、新たな任務を遂行させるためである。ルイ・リュミエールが撮影した作品が、その時期にはきわめて少数であった。貧弱なストックがいち早く底をつくや、同氏は私に若干の作品を撮影させ、さらに旅行を開始するよう命じた。需要に応じて新しい作品を早急に用意するためである。

私の最初の旅行先はスペインであった。かなり心は動揺していた。まったくのひとり旅で、自分しか頼れず、首尾よくできるか心配であった。しかし、最初の数点をリヨンに送付すると、電報で貴重な激励が届いた。自信が芽生えて、不安もやや薄れ、私は旅を続けたのである<sup>5)</sup>。

一般公開の開始から約2年半、シネマトグラフの国外興行は隆盛の一途を辿った。また、リュミエール社より派遣された技術者と興行師はその際に異国の多種多様な情景を録画する。こうした撮影、映写、興行に従事した人々を、本稿ではリュミエール映写技師団と総称する。リト＝ユティネの労作『シネマの起源—リュミエール兄弟とその映写技師団』および『オーギュスト・リュミエール＝ルイ・リュミエール—初期の映画作品1000』は、開拓者として女性を含む69名の関与を確認し、五大陸へのシネマトグラフ伝播を跡づけている。また、サドゥールの点検と分類に従えば、1905年までに制作されたこれらリュミエール映画は、発明者自身の手による60本をも含め、2023本の多きに及ぶ<sup>6)</sup>。

五大陸におけるシネマトグラフの受容は初期映画史の研究として、さらには比較文化の一環として重要で興味深い題目である。幾多の調査や考察にもかかわらず、この世界的な営為にはなお解明すべき余地がきわめて大きい。筆者個人の力量をはるかに超えた課題ではあるが、以下リュミエール映写技師団の足跡を辿りつつ、シネマトグラフの世界的浸透を地域別・各国毎に検討したい<sup>7)</sup>。

## II イギリスにおけるリュミエール映画の受容

シネマトグラフ一般公開が国外で最初に成功を取めたのは、世界経済の中核ロンドンにおいてである。イギリスでの代理人に指名されたトルウェは、1896年2月20日首都目抜きのリージェント・ストリート、王立科学技術会館（ポリテクニク）でリュミエール映画を初めて披露した。南仏出身のトルウェはサーカスや劇団を率いて早くからスペイン、ドイツ、ロシアなどで巡業し、やがてロンドンのミュージック・ホール〈アルハンブラ劇場〉において演芸家として絶賛を博する。すでに1870年頃から彼はリュミエール父子と親交を結び、リヨンにおける最初のシネマトグラフ興行をも担当した<sup>8)</sup>。

産業革命の発展と科学・技術の普及をめざして1839年設立された王立科学技術会館では、通俗的な講演だけでなく、幻燈や花火を用いた娯楽的なショーもしばしば催された。シネマトグラフの一般公開は同会館のマールバラ・ホールで、毎日14時から19時まで5回行なわれた。もともとトルウェは技術者でないため、主として同会館の電気技師マット・レイモンが当初から映写機を操作した。各回20分の映写にフランシス・ポシェットの講演が添えられ、入場料は1シリングであった。マールバラ・ホールにおける歴史的な初日の模様に関しては、『セント・ポール・マガジン』3月7日号にアンナ・ド・ブレモンの詳細な論

評が見出される<sup>9)</sup>。

ロンドンの公衆にリュミエール家の発明を披露する最初の興行が、木曜の午後マールバラ・ホール（王立科学技術会館）で開かれた。有力新聞と芸術団体も当日の催しに招待され、新たな驚異への評価、好意的であるばかりか、熱狂的な評価を示した。相ついで投射された映像を手短かに描写すれば、この種の表現の驚嘆すべき特質、諧謔性と躍動性を盛り込めるといった特質を、読者は明瞭に理解されるであろう。広間の舞台に白布の巨大なスクリーンが拡げられ、真向の奥に〈シネマトグラフ〉ないし電気器械が据えられた。照明が消されて、真っ暗な広間になり、最初の画面として街路の光景がスクリーンに現れたとき、筆舌に尽し難い驚嘆が拡がった。白布のうえを百人もの人影が行き来し、たがいに突き当たったり、立ち止まって話しかけたり、手を振って別れたりする。また、新聞売子が買手を求めるかと思うと、（喧嘩を怖れるかのように）飼犬が逃げ出すなど、あまりに多数の事象が精細に映し出され、すべてを報告できない<sup>10)</sup>。

ブレモンは当日最初に上映された『パリの街路』を以上のように描写し、さらに『列車の到着』、『嬰兒と金魚』、『鍛冶屋』、『ラ・シオタの海水浴場』などの映像を紹介する。マールバラ・ホールの催物案内ではリュミエール映画25本の披露が予告されたが、実際には各回約10本の作品が適宜上映された。なお、専門誌である『イギリス写真評論』、『光学器械』、『魔術幻燈ジャーナル』もシネマトグラフを称賛しつつ、画像の揺れや光線の弱さなど若干の不備を指摘している<sup>11)</sup>。

マールバラ・ホールでの契約は3カ月であったが、予想以上の評判に意を強くしたトルウェは、3月9日からウエストエンドのエンパイア劇場でも上映を開始した。このミュージック・ホールは著名な興行師エドワード・モスによって設立され、堂宇の偉容は劇場街の中心レスター・スクエア広場でいまなお要めをなしている。エンパイア劇場大ホールでの興行はさらに人気を沸騰させ、日に3回ずつ1897年7月まで続行されたあと、アルハンブラ劇場などのミュージック・ホールでもシネマトグラフの映写が組み込まれた<sup>12)</sup>。

すでにイギリスでは興行師ロバート・ウィリアム・ポールがエジソンのキネトスコープを投射的に改良し、1895年末には私的な会合で新しい映写機シアトログラフが披露された。明けて1月14日王立写真協会において彼のアニメーションが喝采を浴び、3月25日からレスター・スクエア広場のアルハンブラ劇場で映写が開始される。こうしてシネマトグラフと拮抗しつつ、同劇場におけるシアトログラフ興行は1897年3月まで続いた<sup>13)</sup>。

この間に五大陸の各地へ進出したリュミエール映写技師団は、シネマトグラフの卓越性を実見させるとともに、異国の景観や出来事を機敏に撮影した。たとえば、モンプレジール工場の従業員ドゥブリエは1895年歳末からスペイン、ベルギー、オランダ、ドイツ、ポーランドを歴訪し、別途ロシアへ入国した主任技師モワッソンと1896年5月28日モスクワで合流する。折しも当地ではロシア皇帝戴冠式が挙行され、その歴史的な式典をドゥブリエは長さ8分の作品に編集した<sup>14)</sup>。こうして製作された『ニコライ二世の戴冠式』こそ、いわば史上初めてのルポタージュ映像であり、早くも2カ月後ロンドンのエンパイア劇場で上映された。興行週刊誌『エーラ』1896年8月1日号はモスクワで撮影されたリュミエール映画についてつぎのとおり絶賛する。

シネマトグラフ・リュミエールの実演がまだまだ続いている。そして、新種の興行

を推進するトルウェは、あらゆる社会階層の関心を惹きつける作品をたえず追加する。たとえば、障害物競争の美事な映像にエンパイア劇場は連日沸いた。〔中略〕追加されたもっとも新しい作品は、モスクワにおけるロシア皇帝戴冠式を主題とし、これに係る一連の情景を如実に映し出す。すなわち、絵のような衣装をした多数のコサック兵が白いスクリーンにまず現われ、モスクワ門を入れていく。ついで由緒ある都市のなかへゆったりと進む騎馬を、数名の軍人が引導する。「式場に向う典札馬車」、「女官たちの行列」、「アジア諸国の大使のパレード」など生命と躍動に満ちている。ロシア皇帝に従ってユージェニ公爵夫人が公式馬車で進まれるのも興味深い。これこそ近代史における最大の盛儀のひとつであって、クレムリンへ入城する皇帝や従臣の行列、あるいは宮廷を出て、教会へ入る皇帝の絵姿には、多くの貴重な見どころが含まれる<sup>15)</sup>。

また、スペインの旅を終えた映写技師プロミオは、ポルドーからイギリスに渡って、エンパイア劇場での興行に協力する。つぎに示す同劇場1896年10月30日のプログラムは、プロミオの製作などフランス国外で撮られた作品を多数含んでいる。①モスクワのタワースカイ街、②子供一犬と猫、③落胆する芸術家、④水晶宮におけるビルマ舞踊、⑤ドイツのハンブルグ橋、⑥マドリッドにおける槍騎兵の行進、⑦パリのコンコルド橋、⑧シュトゥットガルトの槍投師、⑨バルセロナの砲兵隊、⑩ロンドンの消防隊出動、⑪フランスにおける騎馬隊進撃、⑫美事な絵図—スイスの雪橇遊び。

王立科学技術会館の電気技師であったレイモンも新発明普及の一翼を担い、同年5月にはカーディフの新しいミュージック・ホールとマンチェスターの自由貿易会館において、またクリスマスにはリバプールのシェイクスピア劇場で映写を行なった。世界各地で撮影された多様な作品がこうした各地の興行先に急送され、シネマトグラフへの関心を一層高めることとなる<sup>16)</sup>。

イギリスで初めて映画館が開設される1907年まで、シネマトグラフの興行は主としてミュージック・ホールで行なわれた。ミュージック・ホールは19世紀のなかばに大衆的な歌や踊りで人気を博し、ヴィクトリア治世の末期にはエドワード・モスとオズワルド・ストールによって全国的なエンパイア系列の劇場すら築かれた。こうしたミュージック・ホールは風紀上の問題をしばしば伴ったものの、貴族や財界人や文学者も出入りし、下層階級と上流階級を取り結ぶ架橋でもあった<sup>17)</sup>。

### III アイルランドにおけるリュミエール映画の受容

アイルランドの首都ダブリンでシネマトグラフが初めて披露されたのは、1896年4月20日である。グラン・カフェでの興行開始から4カ月後、ロンドンの王立科学技術会館における一般公開から僅か2カ月後にあたる<sup>18)</sup>。イングランド王ヘンリー二世によるダブリン占領以来、隷属と取奪に700年間喘いだこの島で、19世紀中葉から次第に独立運動が高揚し、ケルト人の自治を標榜する党派が1874年の総選挙で大勝した。詩人イエーツや劇作家シングは1891年からアイルランド文芸復興を唱導し、労働運動の指導者ジェームズ・コノリーが1896年5月にダブリンで最初の社会主義政党を結成する。

ロンドンでシネマトグラフを入手したダンロリーは、みづから主宰するスター・オブ・エリン劇場で映写を試みた。彼の指示によって会場では警戒体制が敷かれ、新発明の構造や操作について秘密が守られる。この試写会は4月20日から1週間続き、拳闘、曲芸、ス

## 新しい世紀における大衆芸術の最高の形式

『ロシア皇帝ニコライ二世の戴冠式—モスクワのタワースカイ街』SA307. Dans *Ra*. p.92.  
(1896年5月26日ドゥブリエによって撮影され、ロンドンのエンパイア劇場でも上映された。)

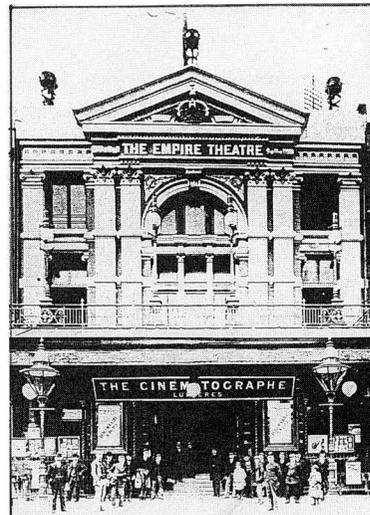


モダンな映画がロンドンで初めて上映されたのは、1896年2月20日、ポリテックにおいてであった。数日後それは「エンパイア劇場」でも、また「アルハンブラ劇場」でも、導入される。〔中略〕このシネマこそが、新しい世紀における大衆芸術の最高の形式としてスタートを切ったのである。

— オールティック著、小池滋監訳『ロンドンの見世物』国書刊行会、1990年。第3巻、367頁。 —

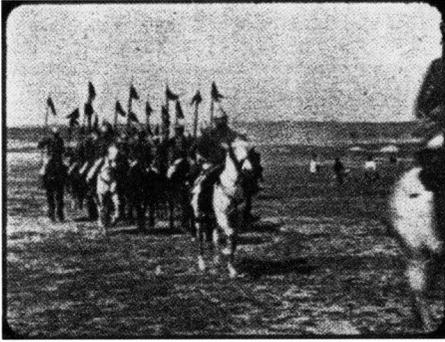


イギリスにおける最初のシネマトグラフ一般公開  
(ポリテック＝マルバラ・ホールの掲示)

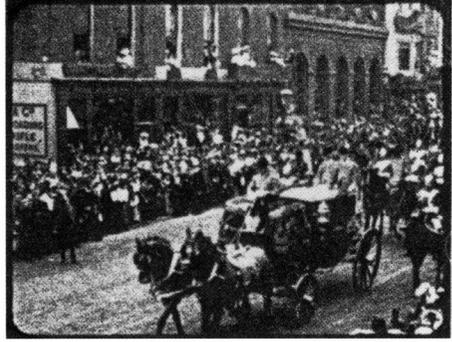


大衆芸術としてシネマトグラフの  
地歩を固めたエンパイア劇場の偉容

『槍騎兵の行進』SA264. dans *Ra*, p.163.  
(プロミオによりスペイン王宮で撮影され、ロンドンでも上映された。)



『モード王女とデンマーク王子チャールズの婚礼パレード』SA248. dans *Ra*, p.162. (バッキンガムでトレヴェにより撮影され、ダブリンでも上映された。)



『オコネル橋』SA708. dans *Ra*, p.93. (プロミオまたはトレヴェに依ってダブリンで撮影され、ロンドンでも上映された。)



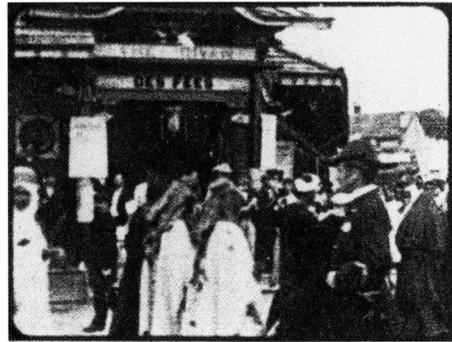
『アンズバース大通り』SA526. dans *Ra*, p.184. (ブリュッセルにおける一般公開の際プロミオによって撮影された。)



『サン・マルコ広場の景観』SA296. dans *Ra*, p.166.  
(ヴェネチアでプロミオによって船の上から撮影された。)



『アラブ人の行列』SA310. dans *Ra*, p.167. (スイス博覧会でプロミオによって撮影された。背後の妖精御殿は日本家屋を模したものの。)



【以上の映像説明においてたとえば SA307はサドゥールによる分類番号307を意味する。】

コットランド舞踊などの情景が映写されたものの、画像が不鮮明で途切れ勝ちであった。再度ロンドンに赴いたダンロリーは代理人トレウェと週70ポンドの契約を結び、エンパイア劇場におけるものと同質のシネマトグラフを借用する。こうして同じくスター・オブ・エリン劇場で10月29日から一般公開が開始され、第1週だけで7千の観衆を集めつつ、11月14日まで続行された<sup>19)</sup>。地元の新聞『自由民報』によれば、ダブリンでの興行においては『列車の到着』などリュミエールの作品が称賛を博するとともに、プロミオないしトレウェの撮影によるロンドンの映像も関心と呼んだ。

摩訶不思議なこの器械〔シネマトグラフ〕は、日常生活で出会う光景や出来事の動く画像を、あらゆる細部まで絶対的な正確さで現出させる。初めて観る人を今回の供覧は仰天させる。観衆の前に置かれたスクリーンに画像が投射され、たとえば混雑する鉄道駅に一連の機関車と客車が邁進してくる。こうした場面の展開はあまりにも真に迫り、映像が造られたものであることを観衆は一瞬忘れてしまう。〔中略〕

ウェストミンスター橋の映像も同じく魅力的と言える。一線をなして疾駆する騎馬隊進撃は壮大な絵図である。モード王女の婚礼と式典後のセント・ジェームズ街パレードは壮麗かつ感動的な映像であり、これを凌ぐのは本物の儀式と行進しかない<sup>20)</sup>。

なお、この際にアイルランドへ出向したトレウェとプロミオは、ダブリンの情景を撮影し、『オコネル橋』など約10本の作品を製作した<sup>21)</sup>。1897年の復活祭にダンロリーは新しいヴァライティ劇場のこけら落しにシネマトグラフを上映する。他方スター・オブ・エリン劇場は同年11月モス＝ストール傘下のダブリン・エンパイア・パレスに改造され、そこでもリュミエール映画が呼びものとなった。以後アイルランドにおいてシネマトグラフが映写されたのは、都市部のミュージック・ホールだけでなく、町村のさまざまな会堂や広場、機器の設置と観衆の収容の可能なあらゆる場所においてである<sup>22)</sup>。

#### IV スペインにおけるリュミエール映画の受容

王政復古で即位したスペイン国王アルフォンソ十二世は1885年に歿し、以後1902年までは彼の王妃マリア＝クリ스티ナが摂政として君臨した。この摂政時代に立憲君主制と二大政党制がほぼ確立し、フランス共和政を理想とする自由主義者サガスタが四たび政権に就いた。しかし、バクニン主義の影響も加わってアンダルシアやカタルーニャで農民・労働者の反乱が頻発し、とりわけ1892年バルセロナの大蜂起では軍隊と労働者8万の市街戦が展開される。

映写技師プロミオがルイ・リュミエールの指示を受けてスペインに入国したのは、1896年の3月ないし4月である<sup>23)</sup>。まもなく彼は首都マドリッドに到着し、マンサナス河畔の広大な王宮へ入った。スペイン王家から受けた処遇をプロミオは『旅日誌』のなかにつぎのように記録する。

マドリッドではシネマトグラフが王宮における小さな革命を惹起した。

騎兵隊や歩兵隊の情景を記録するため、兵営でも練兵場でも撮影できるよう、あらかじめ私は近衛師団司令官を介して王妃に認可を願っていた。摂政である王妃は私から求められたすべてを無二の好意によって容認される。砲兵隊の撮影に取りかかったとき、普通の行進でもの足りぬ私は、発砲してくださいと司令官に叫んだ。両手を天にかざし彼は応える。そんな発砲を命ずる権限は自分がない、行進だけで満足せよ、

と。しかし、なおもそうした要求を続けて48時間後、王妃の認可が下ったことを私は告げられた。こうして将校たちが啞然とするなかで、6門の大砲に各々ふたつの弾薬筒が装填された。シネマトグラフ・リュミエールが君主にも絶大な影響を及ぼすことを彼らも認めたわけである<sup>24)</sup>。

マドリッド滞在中の活動に関してプロミオの『旅日誌』は以上の叙述に止まっている。しかし、彼がスペイン王宮でシネマトグラフを披露したことは、王妃マリア＝クリスティナの熱意から推して確実と思われる。

スペインにおける最初のシネマトグラフ一般公開は、1896年5月15日聖イシドロの祝日にサン・ヘロニモ通りの露西亜館で催された。この高級ホテルは首都随一の盛り場プエルタ・デル・ソル界隈に位置し、会場では『フランス人学校コレージュ・サン・ルイから下校する生徒』などマドリッドで撮影された作品も供された。スペイン映画史の幕開けとなる当日の映写は、通説に従えばプロミオによってなされた<sup>25)</sup>。ただし、研究者スガン＝ヴェルガラが挙げる証左によれば、プロミオは同年4月19日および23日ウィーンに、また5月17日パリ近郊シャトルルに滞在し、露西亜館での興行には参加していない<sup>26)</sup>。

1896年10月にサラゴザ出身のエドゥアルド・ヒメーノがスペイン人として初めて映画を製作した。マドリッドの驚異館で蠟人形の公演を続けるヒメーノは、フランスに赴いてリュミエール製作の器械を購入し、シネマトグラフの巡業を始めた。興行のプログラムを豊かにするため彼は故郷の守護聖人ピカールの祝祭に着目し、最初の作品『サラゴザ・ピカール大聖堂におけるミサ終了後の退出』を撮影する。身近な情景の映像はたちまち町中の評判となり、人々はスクリーンに現われる仲間や自分自身を眺めるべく集まった。このような成功はシネマトグラフの同業者を輩出させ、なかでもバルセロナで興行を始めたブラーボはわずか一日の間に31回の上映を行ない、1万人の観客を捌いたとされる<sup>27)</sup>。

バルセロナの指物師フルクトゥオッソ・ヘラルドは、写真とシネマトグラフに関心を抱き、独自の映写機をも作った。やがて彼はリュミエール社から器械を購入し、1897年8月にスペイン初の劇映画『カフェにおける喧嘩』を作る。翌年には摂政マリア＝クリスティナと彼女の長男アルフォンソ十三世のバルセロナ訪問を撮影し、同国最初のドキュメンタリー映画を世に送った。以後おもに故郷カタルニアを対象としてヘラベルトは、30年間に100本のルポタージュや劇映画を製作し、国際的にも高い評価を獲得するに至る<sup>28)</sup>。

## V ポルトガルにおけるリュミエール映画の受容

ヨーロッパ大陸の最西端ポルトガルでは二十世紀初頭でも文盲率が8割を超え、シネマトグラフの受容もより間接的かつ複雑であった。同国の研究者デビーナの論稿によれば、1896年7月エドゥイン・ルスビィがリスボンの王立コロシウムとポルトの王立大劇場で公演を催し、『エジプト舞踊』や『曲芸する女』などリュミエール映画を披露した。とくに王立コロシウムにおける上映は数週続いて空前の観衆を集め、ウィリアム・ショートの撮影によるポルトガルの映像もプログラムに付加されたと言う<sup>29)</sup>。

こうした興行を推進する技師ルスビィはハンガリー出身とも伝えられ、ロンドンの興行師ポールの指示でポルトガルに派遣されていた。シネマトグラフのイギリス進出に脅威を感じたポールは、みずからの投影式キネストコーブをイベリア半島で売り込もうとしたのである<sup>30)</sup>。雇主の仇敵であるリュミエール社の作品を、はたしてルスビィはポルトガルで上

映したであろうか。それとも旅の途中で立ち寄ったマドリッド等でシネマトグラフを入手し、ポールの意向とは異なる活動を始めたのであろうか。

ポルトガル映画の開拓者オウレリオ・ダバス・ドスレイスは古都ポルトの大フルジョアとして生まれ、農場の経営と穀物の取引で社会的な信頼を勝ち得ていた。写真に熟達した彼は、やがて王立大劇場におけるルスビィの映写に魅了される。その魔術的な器械の購入をリュミエール兄弟から拒否されると、ダバスはパリの市場でシネマトグラフの模造品を入手する。こうして彼はポルトガル初のドキュメンタリー『コンフィアンサ下着工場からの労働者の退出』を撮影した。この作品はポルト市内の企業を題材としているが、ヒメーノの処女作『サラゴザ・ピカール大聖堂におけるミサ終了後の退出』と同じくリュミエール製作『工場の出口』から啓発されたことは明らかである。さらにダバスは植民地ブラジルに渡り、1897年リオ・デ・ジャネイロのルシング劇場を行なった。しかし、動く写真もブラジルでは公衆の関心を惹かず、失意のあまり以後彼は撮影を放棄するに至った。二十世紀の初頭にかけてダバスの悲願はリスボンで継承され、ダコスタ・ヴェイガのルポルタージュ製作、フレイレ・コレイアによるスタジオ設置へと発展する<sup>31)</sup>。

## VI ベルギーにおけるリュミエール映画の受容

フランス以外で初めてシネマトグラフが披露されたのは、ベルギーにおいてである。グラン・カフェでの一般公開に先立つ1895年11月、ブリュッセルの学術的な集会でリュミエール映画が二次にわたり試写された。これら試写会の模様を筆者はさきやや詳しく述べたので、その後のシネマトグラフ受容は手短かに紹介したい。

ベルギー最初のシネマトグラフ一般公開は1896年3月1日ブリュッセルの中核グラン・プラス広場界隈で行なわれた。国王回廊7番地の日刊紙ラ・クロニック特別室が会場に当てられ、1フランの料金で15分毎に観客の入れ替えがなされた。翌日の新聞『独立ベルギー』によれば、試写会の際と同じくここでも『工場の出口』と『ラ・シオタの海水浴場』が人々を驚嘆させた<sup>32)</sup>。

国王回廊での一般公開は大きな反響を呼び起し、アルカザル劇場の支配人マルペリティウスは同年12月11日より喜劇の幕間にリュミエール映画の上映を組み入れる。なお、この時期に映写技師プロミオはベルギーへ出向き、首都のアンスパッス大通りとグラン・プラス広場、さらにはアントワープの港湾と街並を撮影した<sup>33)</sup>。

## VII スイスにおけるリュミエール映画の受容

1896年春ジュネーヴは国内産業と国際関係の発展をめざすスイス博覧会で沸き立っていた。ローヌ河南のプランパレ公園からアルプ両岸にかけてリギ山の大鳥瞰図、ジャワの舞踊劇場、ガラス細工の売店、エジソン発明館等が設けられ、さらには空中鉄道、黒人村、妖精御殿も建造された。なかでもラブアンシー＝クラークの企画による妖精御殿が、日本家屋を模した玄関で際立ち、和風の茶室、魔法の拱門、エジプト市や日本市などの趣向で人気を集める。リュミエール社と交渉したラブアンシーは、博覧会幕開けの5月1日からその会場でシネマトグラフの映写をも開始した<sup>34)</sup>。妖精御殿におけるリュミエール映画の一般公開を地元ジャーナリストはつぎのように記録する。

妖精御殿の演舞場と庭園のわきに高名なシネマトグラフ・リュミエールが置かれて

いた。躍動する多種多様な光景をこの器械はいささかの動きも見逃さず写真撮影し、スクリーンへの強い照明でそれらを実物大で再現できる。かくしてそれはあたかも現実の再現であるように錯覚させる。〔中略〕

海辺で寄せては返す小波と、水液に特有なその流麗さ。カルタをする一組とかれらの戦い。家屋を取り壊す労働者の作業と倒壊されて灰塵に帰す壁。そのほか実に沢山の光景を私はつぎつぎと眺めたのである<sup>35)</sup>。

ほどなくスイスに派遣されたプロミオは、ラヴァンシーの協力を得てジュネーヴ、ローザンヌ、ツェルマット、パーゼル、インターラケンで撮影を重ねる。こうした新規の作品を加えつつ、博覧会閉幕の同年10月18日までに、妖精御殿ではシネマトグラフが170回上映された<sup>36)</sup>。黒人村の管理責任者シモノーはジュネーヴで製作されたリュミエール映画とこれに対するアフリカ人の反応について貴重な証言を遺している。

イスラム教の祭日に黒人村で盛大な行列がカメラの前を行進した。本能的な不信を呼び覚まされよう、私は黒人にあらかじめ知らせなかった。陽画が仕上がったとき、ラヴァンシー氏から試写に招かれた。一緒に行ったのは故イエンチェル博士と、目をかけているひとりの黒人である。〔中略〕ピラン・ニディエと呼ばれるその黒人は、20歳のバンバラ人で、古代の仏像のように端正な青年だった。

私たちふたりの間に座って、ピランは落ち着かなかった。黒人は頑迷に暗闇を怖れており、勇気ある青年もなにが起るか心配した。やがてスクリーンが照らされて、行進を告げる音楽が始まり、すべて順調に運ぶ。ついでピランの仲間たちがつぎつぎと歩む。巨漢のアブドレ、音楽師のママドゥ、獅子の仇名をもつアブドゥ、ファイエ、イスラム教の修道士、〔中略〕そして最後に自分自身を彼は認めた。その際の衝撃をけっして私は忘れない。純朴なピランは体を震わせ、汗を滲ませて、逞しい手の一方を私の方に、他方をイエンチェル博士の腕に押しつけた。セネガルで払い除けた悪魔が出現したと信じたからである<sup>37)</sup>。

ジュネーブ化学学校で学んだ写真家モーリス・アンドレオッシは、プランパレ公園に沿うメイル大通りで1895年夏から変換ジオラマの興行を始めた。この見世物はアルプスの景観をさまざまな土地や角度から映し出し、アルピネウムと呼ばれて喝采を博した。やがて妖精御殿のシネマトグラフに心を奪われ、彼はリヨンに旅してリュミエール兄弟との映写契約に成功する。こうしてスイス博覧会が終了してまもなく、1896年10月5日から11月5日までアルピネウムにおいて第1次興行が実施された。同年9月に撮影された『シャンゼリゼにおけるロシアの君主とフランス共和国大統領』も、リュミエール社から貸与されてアルピネウムで公開される<sup>38)</sup>。こうしたアンドレオッシの企画に当初より大きな期待が寄せられたことは、つぎに掲げる日刊紙『ジュネーブ・トリビューン』からも明らかである。

大勢の人々を確実に惹きつける新しい趣向が、メイル大通りのアルプス・ジオラマで披露される。パリのフランス＝ロシア祭に参加しなかった人も、金曜、土曜、日曜の午後2時から7時までか、8時から11時までにアルピネウムへさえ行けばよい。ここでは白布のうえにシネマトグラフ・リュミエールが、祭典の模様を忠実に再現する。音楽が奏せられるなかを、出迎いの幌馬車、ロシア皇帝、大統領フェリクス・フォーール、騎兵軍団などがつぎつぎと行進するのを、観客は見物できる<sup>39)</sup>。

## VIII イタリアにおけるリュミエール映画の受容

すでにフィレンツェではフィロテオ・アルベリーニがキネトグラフに類した映写機を製作し、1895年11月特許を取得している。翌年の夏以降イタリアでシネマトグラフを引めたのは、主としてピエール・シャピウスである。彼の一家では弟マリウスと妹リュシもリュミエール映写技師団に属し、三者の間で交わされた書翰は国外進出の貴重な史料となっている。リヨンから派遣されたシャピウスは、1896年8月ヴェネツィアに滞在し、サン・マルコ広場に近いミネルバ劇場でリュミエール映画を公開した。この都市の異国的な情景と習俗に魅せられた彼は、イタリア人の怠惰や貧乏に驚き、広場では浮浪者の群れを目撃する<sup>40)</sup>。また、この頃ヴェネツィアに立ち寄ったプロミオは、船上から大運河の景観を撮影した。図らずも成功した史上初の移動式カメラについて『旅日誌』での回想を参照したい。

パノラマの撮影を最初に着想したのはイタリアにおいてである。ヴェネツィアにおいて私は駅からホテルまでの大運河を船で進みながら、次第に両岸が遠ざかるのを目にした。不動のカメラによって動く事物が再現できる以上、その逆として不動の事物を動くカメラで再現したらどうか、とすぐさま私は考えた。ただちに録画を試みてリヨンに送り、リュミエール氏の意見を伺う。その回答は嬉しいものであった<sup>41)</sup>。

以後シャピウスによるイタリア興行は、1896年9月10日モンザ、9月25日ミラノ、12月29日トリノ、1897年1月パレルモ、ローマ、ナポリと続けられる。これら各地での巡業はリュミエール社から委託を受けたふたりのイタリア人、レオポルド・フレゴリおよびヴィトリオ・カルシアに補佐される<sup>42)</sup>。奇術師であったフレゴリは、リュミエール映写技師団に加わった経緯を下記のように述べる。

リヨンのセレストン劇場で演じていると、ある日一等席にルイ・リュミエールがおられると知らされた。同氏の講演を以前に聴き、写真や器械に対すると同じように私は熱中した。ぜひお会いしたい、と助手をとおしてこのフランス人学者にお願いした。

そして、1週間朝から宵まで夕べまでリュミエール社の実験室に閉じ籠り、微小なフィルムの感光、現像、映写、複製について秘訣を学んだ。そこでの試作を奇術のあと映写し、公衆の興味を大いに惹きつける出しものと確信した。同社の作品を上映する許可を私はリュミエール兄弟に申し出た。一定の映像に限るという条件で、ふたりの学者は私に映写器械を貸与してくれた<sup>43)</sup>。

また、ローマ興行のさいに会場アンシアン・カフェを撮影したカルシアは、同じく1897年ドキュメンタリー『公園を逍遙するウンベルト王とサヴォワのマルガレータ』を製作し、イタリア映画の黎明を告げる<sup>44)</sup>。

### 【 註 】

筆者が参照した主要な書物は、本稿において下記の略号で示される。

- Bb : John BARNES, *The Beginnings of the Cinema in England*, Newton Abbot, David and Charles, 1976.  
 Bh : Francis BOLEN, *Histoire authentique du cinéma belge*, Bruxelles, Mémo et Codec.  
 Bi : Peter BONDANELLA, *Italian Cinema*, New York, Cotinuum, 1983.  
 Br : John BARNES, *The Rise of the Cinema in Great Britain*, London, Bishopsate Press Limited,

- 1983.
- BRd* : Freddy BUACHE et Jacques RIAL, *Les Débuts du cinématographe à Genève et à Lausanne 1895-1914*, Lausanne, Cinémathèque suisse, 1964.
- Bs* : Gian Piero BRUNETTA, *Storia del cinema italiano 1895-1945*, Roma, Editori Riuniti, 1979.
- Ch* : G.-Michel COISSAC, *Histoire du cinématographe*, Paris, Cinéopse et Gauthier-Villars, 1925.
- Cl* : Bernard CHARDERE, *Les Lumières*, Lausanne, Payot Lausanne, 1985.
- Dhc* : Jacques DESLANDES, *Histoire comparée du cinéma*, Tournai-Paris, Casterman, 1966. 2 volumes.
- Dhs* : Hervé DUMONT, *Histoire du cinéma suisse*, Lausanne, Cinémathèque suisse.
- Lc* : Emmanuel LARRAZ, *Le Cinéma espagnol des origines à nos jours*, Paris, Cerf, 1986.
- Ra* : Jacques RITTAUD-HUINET, *Auguste et Louis Lumière, Les 1000 premiers films*, Paris, Philippe Sers Editeur, 1990.
- Rc* : Jacques RITTAUD-HUINET, *Le Cinéma des origines, les frères Lumière et leurs opérateurs*, Seyssel, Champ Vallon, 1985.
- Rci* : Kevin ROCKET, Luke GIBBONS and John HILL, *Cinema and Ireland*, London, Routledge, 1988.
- Rcp* : Felix RIBEIRO, Luis DE PINA et José DE MATOS CRUZ, *Le Cinéma portugais*, Paris, Centre Georges Pompidou.
- SLm* : Georges SADOUL, *Lumière et Méliès*, Paris, Lherminier, 1985.
- イス : 乾英一郎著『スペイン映画史』芳賀書店, 1992年。

- (1) *SLm*, pp.51, 53. 拙稿「映画の創出とルイ・リュミエール〈その1〉, 〈その2〉」『愛知教育大学研究報告(人文科学)』第41輯(1992), 第42輯(1993)。
- (2) *Rc*, p.40. *SLm*, pp.11, 51.
- (3) Louis LUMIERE, Lettre au marquis d'Osmond. cité dans *SLm*, p.51.
- (4) *SLm*, p.52. *Rc*, pp.40, 141, 151, 161-164, 187-190.
- (5) Eugène PROMIO, Carnet de route. dans *Ch*, p.195. これら映写技師の回想は細部においてしばしば不正確であり, とりわけプロミオの経歴と活動は多くの謎を含んでいる。Jean-Claude SEGUIN-VERGARA, La Légende Promio (1868-1926). dans *I 8 9 5, Association française de recherche sur l'histoire du cinéma*, No 11 (décembre 1991). pp.94-100.
- (6) *Rc*, pp.59- . *SLm*, pp.126-145. 1897年5月パリ慈善バザーにおいて映写会場が炎上し, フランス内外でのシネマトグラフ興行は最初の危機に見舞われる。
- (7) デラントの名著『比較映画史』はサドゥールの著作をとくに重要なリュミエール研究と評価しつつ, 世界各地でのシネマトグラフ受容について二次的な資料への依存や史実確定の粗雑さを批判している。( *Dh*, pp. 270-271.) ただし, デラント自身の名著でもリュミエール映画との関連が考察されている地域は, 欧米の数ヶ国に止まる。
- (8) *SLm*, p.53-145. *Rc*, pp.187, 190-191. *Bb*, pp.83-84.
- (9) R.D. オールティック著, 小池滋監訳, 『ロンドンの見世物』国書刊行会, 1990年。第3巻, 85-101頁。*Rc*, P.191. *Bb*, P.89.
- (10) Anna de BREMONT, Living Photography. in *St. Paul's Magazine*, 7 March 1896. in *Bb*, pp. 84-85.
- (11) *Bb*, pp.85-89. (12) *Bb*, pp.89-91.
- (13) *Dh*, Tome I, pp.244-253, Tome II, pp.341-343. *Br*, pp.8-27.
- (14) *Rc*, pp.91-92. (15) *The Era*, 1 March 1896. in *Rc*, pp.91-92.
- (16) *Rc*, pp.141-142, 192, 195, 199, *Ra*, pp.230, 233, 234. *Br*, pp.124-130. PROMIO, *op. cit.* p. 195.
- (17) L.C.B. シーマン著, 社本時子ほか訳『ヴィクトリア時代のロンドン』創元社, 1897年。187-195頁。井野瀬美恵著『大英帝国はミュージック・ホールから』朝日新聞社, 1990年。47-57, 391-397頁。

- (18) *Rci*, p.3. (19) *Rci*, p.3.  
 (20) *Freeman's Journal*, Novemver 1896. in *Rci*, p.4.  
 (21) *Rc*, pp.236-238. *Slm*, p.136.  
 (22) *Rci*, pp.4-5. 因みにアルイランド最初の常設映画館ヴォルダは1909年文学者ジェームズ・ジョイスの尽力によって造られる。トリエステでの成功を聞いた彼は、妹エヴァの激励に意を固め、4人の実業家と提携した。これら実業家はトリエステの映画興行に係りを持ち、イタリア人映写技師もダブリンに招かれた。( *Rci*, pp.5-6.)  
 (23) *Rc*, pp.141, 144, 236. SEGUIN-VERGARA, *op. cit.*, p.97.  
 (24) PROMIO, *op. cit.*, pp. 195-196. (25) *Lc*, p.21. イス, 6-9頁。  
 (26) SEGUIN-VERGARA, *op. cit.*, p.97. なお、興行実施の日付も5月15日ではなく、その前日5月14日である、とスガン=ヴェルガラは当時の新聞記事を根拠に主張する。  
 (27) *Lc*, p.21-22. イス, 8-10頁。 (28) *Lc*, p.22-23. イス, 12-13頁。  
 (29) Luis DE PINA, *Le Cinéma muet français au Portugal. dans Le Cinéma muet français dans le monde*, Cinématique de Toulouse, 1989. p.115. *Rcp*, p.7.  
 (30) *Rcp*, p.7. なお、リュミエール映写技師団のだれかが、ポルトガルへ出向いた痕跡はリト＝ユニティネの調査によっても見出されない。  
 (31) *Rcp*, p.7-8.  
 (32) *Bh*, pp.21-23. Georges ONCLINCX, *Les Débuts du Cinématographe Lumière à Bruxelles après les journaux du temps. dans La Revue d'histoire moderne et contemporaine*, juillet-septembre 1955. pp. 222-223.  
 (33) *Bh*, pp.23-24, 33. ONCLINCX, *op. cit.*, pp. 223-225.  
 (34) *BRd*, pp.4-5. *Dhs*, p.21. (35) Jules MONOD, *Souvenir. cité dans BRd*, p.5.  
 (36) PROMIO, *op.cit.*, p.197. *Slm*, p.130. *BRd*, pp.7-8.  
 (37) Témoignage de P. Simont. cité dans *BRd*, pp.6-7. フランス語圏でもローザンヌにおける一般公開ははるかに遅れ、1898年2月ようやく実現する。( *BRd*, p.74.)  
 (38) *BRd*, pp. 9-12. *Dhs*, p.21.  
 (39) *Tribune de Genève*, 22 octobre 1896. cité dans *BRd*, pp.12.  
 (40) *Br*, pp.19-20. *Rc*, p.115. *Bi*, p.1. (41) Promio, *op.cit.*, p.197.  
 (42) *Rc*, pp.115-123, 228, 231-232. *Br*, pp.21-22.  
 (43) Vittorio CALCINA. cité dans *Cl*, pp.112-113.  
 (44) *Br*, pp.24-25. *Rc*, p.228. *Bi*, p.1.

(平成5年9月13日受理)